

図画工作教育講座9 《 共同制作 》

共同制作は大画面になり、迫力があるので、卒業制作や学校行事などに向けて制作されることが多い。

学校における共同製作のねらいは

私もこの作品を作った一員なのだという感動や実感・学級のまとまりや一体感を育むことにある。



しかし、絵の上手な子を重用して、狙いとは逆の結果に陥ることがある。

子どもたちの目標 立派な作品・上手な作品にしたい。

教師の目標 学級づくりの手段として活用したい。

教師が子どもたちと同じように、立派な作品・上手な作品づくりを目標にしてしまえば、絵が苦手な子に、空や地面の色塗りなど目立たない無難な作業を割り振って、意欲を喪失させかねない。

教師は、子どもよりも一段高いレベルの目標を持つべきである。

学級全員の子どもが達成感を味わえる共同製作のポイントは、

① 何をテーマにするか

子どもに任せるといろいろな意見が出てまとまらない。多数決で決めても不満が残り、スタート時点から一体感が壊れてしまう。教師が主導して、子どもたちの興味・関心を高める提案をする。

例① 1999年ミレニアムの年に、[100年後の私たちの町]を作ってみようという提案して意欲を高めた。

② 下絵の準備 ベースとなるベニヤ板の地面や空は、教師が描く。

絵が不得手なこの役割にしない。(希望者がいれば手伝わせることも可)

③ 役割分担 低学年は花、中学年は樹木・鳥、高学年は未来の建物・乗り物として、1人1個を色紙の貼り合わせ(コラージュ)で自分なりに表現する。



④ 構成 子どもたちの制作した作品の配置は、教師が担当する。つまり、教師と子どもとの共同製作。この作業を通して、教師も子どもも学級としてのまとまりを実感できる。

例② 興味を惹く題材名[空飛ぶ魚]と未経験の技法[ステンドグラス]で意欲を高める





一人一匹を製作し
作品は階段の踊り場に設置



* クラス全体で作品をつくる時は、誰かがたくさん頑張ってつくりあげるといよりも、クラスの一人ひとりが製作に携わり、自分もこの作品をつくった一人なんだと達成感を味わわせ、クラスの一人であることを感じさせるようにすることが大事なんだと思った。

このことから図工という教科は、単に絵を描いたり鑑賞したりするだけの教科ではなく、子どもに連帯感や責任感を感じさせ、学ばせることができる教科なんだなあと感じた。

* 私は共同制作の授業が印象に残っています。中学校を卒業するとき、卒業生全員で効果を1～2文字ずつ分担して彫りました。卒業式の日、木でつくった校歌は、字の大きさが細かったり太かったり、それぞれちょっとずつ失敗した部分もありましたが、飾られているのを見てとても感動し、自分の学年のことが本当に好きだなと思いながら卒業することができました。

美術は得意不得意があるので、得意な子を優先させれば、もっと素晴らしいものができたかも知れない。だけど美術の先生がそうしなかったのは、私のように「この学年でよかった！」と思えるような子を増やすためだったかもしれないと、授業を受けながら思いました。

* 私が最も重要と考えたのは、共同制作の取り組み方です。クラス全員でつくるものだから、子どもたち全員が主役であるということ再認識できて、且つ強く印象づけられたからです。そのために教師は、興味ある題材やベースとなる土台部分の構想をしっかり持つべきだと思いました。

自分が教師になって、子どもたちに教えるときに、様々なところに活かせると思ったので、忘れないようにしたいです。

* 「共同制作」が重要である。作品づくりと同時に学級づくりの役目も果たしていることを知り、共同制作の素晴らしさに気付いたからである。自分も、将来教師として児童の前に立った際は、この共同制作で学級づくりを行っていきたいと思った。

* 印象に残ったのは、学級のみinnで一つの作品をつくりあげる共同制作である。運動会などがテーマだと、絵が苦手な私はメインの所はやりたくないと思うが、この授業では、そうならない教師の工夫があった。

教師の工夫や手立て次第で、絵や工作の苦手な子どもでも、楽しみながら主役となれる授業がつけられるのだと思った。過去の経験や今回の講座で学んだことを活かせる教師になりたいと思った。